

『ニーベルンゲンの歌』における
クリエムヒルト像の特質

石 川 栄 作

「九州ドイツ文学」第4号 別冊
平成2年9月25日 発行
KYUSHU DOITSU BUNGA KU 2
1990

『ニーベルンゲンの歌』における クリエムヒルト像の特質

Zur Charakteristik Kriemhiltis im Nibelungenlied

石川 栄 作
Eisaku ISHIKAWA

序

『ニーベルンゲンの歌』は、五、六世紀の古代ゲルマン英雄伝説を素材として十三世紀初頭に成立したものである。その生成過程に関しては1921年のA. ホイスラーの研究¹⁾が画期的なものであり、それによると『ニーベルンゲンの歌』の前史はブリュンヒルト伝説とブルグント伝説から成り立っている。『ニーベルンゲンの歌』は後者の第三段階であるブルグント族滅亡の叙事詩、いわゆる『古きニーベルンゲン災厄』に前者の第二段階である新ブリュンヒルト歌謡が結び合わされて成立したのであるが、ニーベルンゲンの詩人はその際、クリエムヒルトを自らの作品の中心に置き、クリエムヒルトを独自の方法で形象化することによって、二つの素材を一つにすることに成功したのである。前編にあたるジーフリトの死の物語は、従って、かつてのブリュンヒルト悲劇ではなく、クリエムヒルトの復讐物語の前提部となった。重心はブリュンヒルトからクリエムヒルトに移されたのであり、ブリュンヒルト（ブリュンヒルト）²⁾の役割は両王妃口論を展開させ、ジーフリト暗殺のきっかけを作るだけである。北欧のエッダやサガではブリュンヒルトがますます重要となっているのに対して、ドイツの叙事詩ではクリエムヒルトが中心人物となっている。このクリエムヒルトを作品の中心に据えたことはニーベルンゲンの詩人のまず第一の業績であり、この人物像の理解こそこの作品の解釈の鍵であるように思われる。そこで本稿では、この作品におけるクリエムヒルト像の特質を明らかにして、中世叙事詩としての『ニーベルンゲンの歌』³⁾の特質を探り出すことにしたい。

I. 貴婦人(frouwe)クリエムヒルト

1. ジーフリトとの結婚 — liebendes magedîn —

『ニーベルンゲンの歌』における中心的な人物はクリエムヒルトであり、この作品の筋はまさに彼女をめぐる展開するということは、冒頭の第一歌章の導入詩節からも明らかである。第一詩節は前置きとして恐らくのちに付け加えられたものであるから、叙事詩はもともと純粋なクリエムヒルトの次のような詩節でもって始まっていたのである⁴⁾。

Ez wuohs in Burgonden ein vil edel magedîn,
daz in allen landen niht schoeners mohte sîn,
Kriemhilt geheizen: si wart ein scoene wîp.
dar umbe muosen degene vil verliesen den lîp. (2)

むかしブルゴントの国に、いともあてなる姫が生まれた。
その名をクリエムヒルトといい、世にまたとあるまじき美しい姫で、
やがてひとりまえの麗人として生い育ったが、
彼女のためにはあまたの勇士が命を失う運命であった。

一行目の「生まれた」(wuohs)と三行目の「生い育った」(wart)は、成長してゆくクリエムヒルト像の伝記的性格を強調している⁵⁾。そのあとの第四詩節でようやく挙げられるブルゴント国王兄弟は、すでに固定されてしまった、刻印されてしまった人物として描かれているだけに、このクリエムヒルトの「いともあてなる姫」(ein vil edel magedîn, 2,1)から「ひとりまえの麗人」(ein scoene wîp, 2,3)への成長過程の描写は、全体をクリエムヒルト・ロマンとして決定づけている⁶⁾と言える。『ニーベルンゲンの歌』はこのようにクリエムヒルトの名を挙げることでもって始まっており、のちのあらゆる出来事はクリエムヒルトとの関係で起こる、否、それどころか、上記引用詩節の四行目からも明らかのように、クリエムヒルトによって惹き起こされるのである。

このことはその直後に語られる「鷹の夢」においてさらに明白となる。ブルゴント国の姫クリエムヒルトは、すなわち、あるとき彼女の飼っていた鷹が二羽の鷲の爪に引き裂かれた夢を見たのであるが、それを聞いた母后ウオテは姫に「その鷹は気高い殿御であり、運が悪いと、そなたは殿御

をじきに失わねばなるまい」(14,3-4)と夢占いをする。「恋のよろこびが結局悲しみをもたらす」(17,3)ことをすでに知っていたクリエムヒルトは、心のうちで恋というものをあきらめて、長い年月、楽しい日々を送りむかえたが、しかし、やがて彼女も、晴れてある勇士の妻となる日が来た。この「鷹の夢」の場面を締めくくって詩人は次のように語っている。

Der was der selbe valke, den si in ir troume sach,
den ir besciet ir muoter. wie sere si daz rach
an ir naehsten maegen, die in sluogen sint!
durch sin eines sterben starp vil maneger muoter kint. (19)

この勇士こそ、姫が夢にみて、母君が占ったあの鷹であったのだ。
後にこの勇士を殺害した自分の近親の人々に、
彼女はどれほどひどい復讐を遂げたことであつたらうか。
この一人の死のために幾多の母の子らは命を失つたのだ。

ここですでに愛らしいブルゴント姫とともにブルゴント族滅亡の復讐魔としてのクリエムヒルトも予示されており、全体はこの一女性によって統一されていることが明らかである。このクリエムヒルトの「鷹の夢」は、素材においてすでに語られていたものと推定される⁷⁾が、しかし、それはまだブリュンヒルト伝説の枠内にとどまったままであり、復讐については触れられていなかった。ニーベルンゲンの詩人はその「鷹の夢」を踏襲してクリエムヒルトを中心人物としたばかりか、さらにその中に夫のための復讐を盛り込むことによって前編の素材と後編の素材とを一つに結びつけることに成功したのである。

全体が愛しい夫のための復讐となったため、その夫ジーフリトは生い立ち等の点で改作を施されねばならない。伝承によれば、ジーフリトは本来古代ゲルマンの英雄であり、実際にこの作品の中でも、「彼はニーベルンゲンの財宝を獲得し、また竜をも退治して肌が不死身の甲羅と化して、いかなる武器でもって傷つけられ得ない英雄となった」(86-101)ということがあとでハゲネによって語られるが、しかし、この作品ではとりあえずまずはニーデルラントの騎士的王子として登場するのである。クリエムヒルトの「鷹の夢」のあと、すぐに紹介されてジーフリトはこう語られている。

Dō <u>wuohs</u> in Niderlanden	<u>eins edelen küneges kint,</u>
des vater der hiez Sigemunt,	sîn muoter Sigelint,
in einer rîchen bürge	wîten wol bekant,
nidene bî dem Rîne:	diu was ze Santen genant. (20)

さて、ニーデルラントの国に気高い一人の王子が生まれた。
 父の名はジゲムント、また母はジゲリントと呼ばれた。
 それはライン河の下流地方で、ひろくその名がきこえている
 ザンテンという立派な城下町でのことである。

この「生まれた」(wuohs)という表現はクリエムヒルトの場合(2,1)と対をなしていることは明らかである。ジーフリトは、「いともあてなる姫」(ein vil edel magedîn, 2,1)のクリエムヒルトと同様に、固定された人物ではなく、成長する「気高い一人の王子」(eins edelen küneges kint, 20,1)として登場し、やがて宮廷にも出かけるようになり(24,1)、また分別をもって美しい女にも愛を求めるようにもなってきた(26,3)のである。ブルゴント国に世にも美しい乙女がいるという噂を聞いた(44,2)とき、彼が求めたのは「位たかき乙女の愛」(höhe minne, 47,1)であったと表現されているのも決して意味のないことではない。ジーフリトはクリエムヒルトの高きミンネを求めて冒険の旅に出かけてゆく典型的な中世騎士であり、それ以後の二人の物語はミンネザング風に刻み込まれた感情と思考において進展しているのである。ウォルムスに滞在しているうちに彼が出征することになったザクセン戦争も、ただクリエムヒルトへのミンネ奉仕こうこうに結びつけられている⁸⁾ことは明らかである。その祝勝会の席で「皓々たる月が星々を圧して照りわたるように」(sam der liehte mâne vor den sternen stât, 283,1)、クリエムヒルトが初めてジーフリトの前に姿を現わすと、彼はミンネザング特有の「妄想」(wân, 285,2)に陥る。

Er dâht' in sînem muote:	《wie kunde daz ergân,
daz ich dich minnen solde?	daz ist <u>ein tumber wân.</u>
sol aber ich dich vremeden,	sō wære ich sanfter tôt.》
er wart von den gedanken	vil dicke bleich unde rôt.
	(285)

彼は心に思った、「どういふ間違いで、
 姫を恋するようになったのか。それはとんでもない思いあがりだ。
 さりとて思いあきらめるくらいなら死んだほうがよほどました。」
 思い乱れるあまりに、彼はあか赧くなったりあお蒼くなったりした。

本来古代ゲルマン的な勇士であるジーフリトも、ここではクリエムヒルトの相対物として、ミンネの苦しきをも経験する宮廷的騎士として描かれている。やっと会うことができ、挨拶を受けたにしても、ジーフリトはまだなおクリエムヒルトを妻にすることはできない。この愛の実現の延期は、クリエムヒルトへの愛の深さを表している。愛を勝ち取るためには、もう一つの試練としてジーフリトは、グンテル王がプリュンヒルトの愛を求めてイースラントへ旅立つ際に援助をしなければならない。本来古い素材に属するこのイースラントへの随行は、ここでは先のザクセン戦争と同様、クリエムヒルトに対するジーフリトのミンネ奉仕に変えられてしまっている⁹⁾のであり、この冒険をも見事に克服してのちようやく、ジーフリトはクリエムヒルトを妻にすることができるのである。

このようにグンテル王の求婚は同時にジーフリトの「目的達成」をも意味しており、その限りにおいてこのイースラントでの出来事もクリエムヒルトの伝記をさらに先へ進めている¹⁰⁾のであるが、その際注目すべきは、ジーフリトとグンテル王の求婚から結婚までの出来事が対比的に描かれているということである。ジーフリトがブルゴントの国に美しい乙女がいるという噂を伝え聞いて(44,2)ウォルムスに出かけて行ったように、グンテル王も海のかなたに一人の美しい女王が君臨しているのを伝え聞いて(326-8)イースラントへ出かけて行くが、乙女の愛を自分一人の力で手に入れる(59,1)ジーフリトに対して、グンテル王の場合は最初から他人の力を借りて(332)の求婚である。美しい乙女を面前にしたときのジーフリトの悩みがミンネザング風の「妄想」(wān, 285, 2)であったのに対して、女豪傑プリュンヒルトを目の前にしたときのグンテル王のそれは「恐怖」(sorgen, 441, 4)である。

Er dächte in sīnem muote:	《waz sol diz wesen?
der tiuvel ūz der helle	wie kund' er dā vor genesen?
wær' ich ze Burgonden	mit dem lebene mīn,
si müeste hie vil lange	vrī vor mīner minne sīn.》(442)

彼は心に思った、「これはなんとしたことか。
地獄の悪魔といえども、これには命を全うするわけにいくまい。
おれが生きてブルゴントの国へかえれたら、
もはや二度とこんな女に思いをかけることはなからう。」

これを上で引用した285詩節のジーフリトのミンネザング風の「妄想」(wan)と比較してみるがよい。求婚する騎士が対照的に描かれていることが明らかであり、また求婚される女性の方も著しいコントラストをなして描かれていることが容易に理解されよう。事実、プリュンヒルトよりもクリエムヒルトを優遇していることは、593詩節の詩人自身の言葉ばかりではなく、さらにその後それぞれの婦人が花婿と結ばれる場面でも明らかである。クリエムヒルトは兄グンテルから結婚の話を聞かされたとき、乙女ごろの慎ましやかさと当然の服従(613-5)でもって、兄の望みと同時に自分の密かに抱いていた望みに従うのであり、王子ジーフリトが品位ある愛をもって花嫁のそばにかしづいたときも、「彼女は彼にとっていのちとなった。彼女の一身は、千人の他の女にも換えがたいものであったろう」(629,3-4)と称えられている。これに対してグンテル王がジーフリトの援助で花嫁にすることができたプリュンヒルトのそばに横たわろうとすると、彼女はこれを拒み、夫に対して手ひどい苦痛(leide,636,4)を与えたのである。またもやジーフリトの秘策の手を借りて初めてグンテルはプリュンヒルトを妻とすることができるのであり、ジーフリトの場合と著しいコントラストをなしていることは一目瞭然である。このようにグンテル王とプリュンヒルトとの肉欲的な愛と著しいコントラストをなして、ジーフリトとクリエムヒルトとの理想的な結婚は、ミンネザング風に展開されているのであって、要するに、クリエムヒルトは中心的人物であり、もっぱら「愛する乙女」(liebendes magedin)として描かれているのである。しかし、まさにこのプリュンヒルトと対比的に描かれたクリエムヒルトの愛がのちには悲惨な悲劇の原因ともなるのであり、そこにまたこの『ニーベルンゲンの歌』のミンネの悲劇的な特質があるのである。

2. プリュンヒルトとの口論 — leidende frouwe —

求婚の際に対照的に描かれていたクリエムヒルトとプリュンヒルトは、結婚して王妃の地位に就いたのちも対比的に描かれている。クリエムヒルトが王妃というよりは相変わらず夫を愛する宮廷的貴婦人であるのに対し

て、プリュンヒルトの方は王妃という地位に固執した高慢な王妃である。二組の夫婦がそれぞれの国で暮して十年の年月を経た頃、高慢なプリュンヒルトは、臣下である筈のジーフリトが久しいこと宮廷に伺候していないのを腹立たしく思っていた。ジーフリト夫妻が彼女に疎遠に打過ぎて、ニーデルラントの国からいっこう出仕もしないことはプリュンヒルトには侮辱 (leit, 725, 2) であったのである。「来いと命ずるわけにもゆかぬ」 (727, 3) と言うグンテル王に対して、プリュンヒルトは抜かりなく、「国王の家来たるものはどんなによい身分であろうと、主君の命令とあれば、それに従わぬわけには参りませぬまい」 (728, 1-2) と言い返したあと、企みに満ちた巧みな言葉 (729-30) でもってグンテル王を説き伏せる。王妃があくまでもせがむので、国王もついに饗宴への招待という形でジーフリト夫妻に招待の使者を送る。一方、招待の知らせを受けたクリエムヒルトは、懐郷の悩み (herzeleide, 741, 3) をおぼえていた女性として描かれており、この便りは彼女には好ましく思われた。企みに満ちた招待側のプリュンヒルトと対照的に、招待を受けたクリエムヒルトは歓びのために顔を輝かして、喜んでその招待に応じたのであり、彼女としては何の意図もない。ブルゴントの故郷に恋いこがれて旅立つのである。

ジーフリト夫妻がウォルムスに到着したときも、クリエムヒルトは世にも美しい女性として描かれている (799) 一方、プリュンヒルトは依然としてジーフリトを臣下として見ている (803) 高慢な王妃である。やがて両王妃が相並んで座につき、誉れ高い二人の武士のことを語り合ったときも、クリエムヒルトはただ何の意図もなく、愛する夫の誉れを称えているに過ぎない。

Dō sprach aber Kriemhilt:	《nu sihestu, wie er stât,
wie rehte hêrlîche	er vor den recken gât,
<u>alsam der liechte mâne</u>	<u>vor den sternen tuot?</u>
des muoz ich von schulden	tragen vroelîchen muot.》
	(817)

クリエムヒルトが言い返した、「あの人の様子をごらんなさいませ。
さっそう颯爽として武士たちの前に行く姿は、
こうこう皓々たる月が星々を圧して大空をわたるようではございませんか。
 私がこんな晴れやかな気持でおられるのも当然でしょう。」

クリエムヒルトがこのようにゾーフリトの颯爽たる姿を星よりも美しく輝く月に^{たと}喩えるとき、彼女がかつてザクセン戦争後の祝勝会の場面でほめ称えられたと同じ言葉（上述283詩節1行目）を用いているのも、決して偶然ではない¹¹⁾。夫ゾーフリトを愛する女性としてクリエムヒルトは、単に無意識的に^{いと}愛しい夫を称える言葉を述べたに過ぎないのに、その無邪気な言葉がプリュンヒルトの王妃としての威厳を傷つけ、そのことが王妃たちの激しい口論へと発展してゆく。従って、この両王妃口論で言えることは、クリエムヒルトではなく、プリュンヒルトがその口論を煽っており、クリエムヒルトを意識的に怒りへ刺激しているということである。クリエムヒルトは長い間自制したのち、ついに怒りを覚えて、プリュンヒルトを^{そばめ}側女 (kebse, 839, 4) と罵るが、このとき彼女にそのような言葉を吐かせたのも、結局はゾーフリトへの彼女の情熱的な愛である¹²⁾。ゾーフリトを愛する妻として彼女は夫をグンテル王の家来 (man, 821, 2) に見られることに耐えられないのである。このようにゾーフリトへの熱烈な愛が、両王妃の口論を激化させ、悲劇の原因ともなったのである。

ハゲネの策略によって一族が再度ザクセン戦争に出かけることになり、ハゲネが^{いとまご}暇乞いのためクリエムヒルトの座所に伺候したときも、クリエムヒルトはただ夫ゾーフリトを愛するがゆえに、夫を護ってもらいたく、夫の急所をハゲネに打ち明けてしまう。しかし、戦闘が中止となり、狩りに出かけることになると、打ち明け話をしたことによってかえってクリエムヒルトの心配は増してくる。彼女はその不安を夫にほのめかして狩りに出かせないよう警告するが、ゾーフリトは一族を信頼してそれを軽くうけながす。彼女は悪夢を引き合いに出して再度警告するが、夫の英雄としての誇りを大切にす気持ちから、ハゲネに秘密をもらしたことは打ち明けることができない。彼女の二度にわたる警告の中には、彼女の愛と不安が複雑に入り混ざっていると言えよう。

こうしてまさに夫を大切に想う心からクリエムヒルトは、逆に夫を失う結果となるが、彼女の愛がいかに大きいものであったかは、ゾーフリト埋葬の際にも容易に読み取られる。柩はすでに閉じられてしまっていたけれども、埋葬の前にもう一度夫を見たい(1068)という彼女の希望は、彼女の情熱の激しさを示している¹³⁾。埋葬後、父王ジゲムントは帰国したのに、クリエムヒルトはウォルムスにとどまったのも、亡き夫のそばにいたいからであり、事実彼女はゾーフリトの魂の冥護を祈るために、寺院に詣でることをやめなかった。心から夫を愛する女性は今やその愛ゆえに節度なく

「苦しむ女性」(leidende frouwe)であり、この過度な苦しみは、永久的な宗教的修練によっても和らげられはしないほど、深いものである¹⁴⁾。

このような彼女を決定的に悲しめる女性にさせてしまうのがハゲネによる財宝強奪である。またもやハゲネの策略によって、兄と和解したクリエムヒルトは、ジーフリトの財宝をウォルムスへと運ばせるや、それをハゲネに奪われてしまうのである。この財宝強奪はクリエムヒルトにとって新たな悲しみを意味しているが、クリエムヒルトは死んだジーフリトを悲しんでいるのであって、財宝に基づく権力のことを悲しんでいるのではないことは次の詩節から明らかである。

Und wære sîn tûsent stunde noch also vil gewesen,
und solt' der herre Sîfrit gesunder sîn gewesen,
bî im wære Kriemhilt hendeblöz bestân.
getriuwer wîbes künne ein helt nie mër gewan. (1126)

しかし、たとえこの宝がその千倍あったとしても、
もし勇士ジーフリトを元のすこやかな身に返すことができたなら、
クリエムヒルトは手を空しくして彼の許に留まったであろう。
勇士たるもの、こんな貞節な妻はもった例がなかった。

財宝強奪がクリエムヒルトにとってさらに悲しいことであったのは、すなわち、それがジーフリトの後朝の贈物であり、ジーフリトの象徴であったからである。このように前編ではクリエムヒルトの限りない愛が展開されており、愛が深ければ深いだけ、その悲しみもそれだけ一層深いのである。

II. 復讐魔(vālandinne)クリエムヒルト

1. エッツェル王との再婚 — triuweな未亡人 —

ジーフリトに対するクリエムヒルトの愛がいかに深いものであったかは、十三年後フン族のエッツェル王の求婚を受けたとき、亡き夫に対して誠実(triuwe)を示すことから明らかである。使者リュエデゲールからエッツェル王の趣を聞き知ると、彼女は断固としてその求婚を拒むのである。

Dô sprach diu küneginne: 《marcgrāve Ruedegēr,

wær' iemen, der bekande mīniu starken sēr,
 der bæte mich niht triuten noch deheinen man.
 jā verlōs ich ein den besten, den ie vrouwe gewan.》
 (1233)

妃はこたえた、「辺境伯リュエデゲールよ、
 私の手ひどい心の痛みを知っている人なら、
 二度と男を愛せよと勧めはしますまい。かつていかなる婦人も
 得たことのないようなすぐれた^{とのこと}殿御を私は失った身なのです。」

これに対してリュエデゲールは「心の痛み(leide)をいやす(ergetzen)ものとしては、優しい愛情のほかにはごさいません」(1234,1-2)と言って彼女を慰めさとするが、彼女の決意は固い。リュエデゲールは、翌日再度対面できることを一縷^{いちろ}の望みとして、ひとまずそこを辞するが、一方、クリエムヒルトはそのあとギーゼルヘルと母后とに迎えをやって、この二人に自分の胸のうち——自分にとってふさわしいのは泣くことだけ(1242,3-4)ということ——を語る。王弟ギーゼルヘルが姉に向かって、その悲しみは強大な国王エツェルとの結婚によって償われもしようと言ってしきりに納得させようとするが、彼女はそれをも固くはねつける。母后ウオテも同様に兄弟たちの勧めに従うがよいと説得するが、そのときも彼女の心のうちは依然と変わらぬままである。

このような強い決心は、前編の「鷹の夢」の際に見られたクリエムヒルトの愛の断念と対をなしていると考えることができるが、翌日再度リュエデゲールに対面し、彼の誠実な誓いを聞くや、彼女の決心はついに揺らいでしまう。このリュエデゲールの誠実な誓いは、素材には由来せず、この作品で初めて創作されたもの¹⁵⁾で、その点で重要な場面であるが、このときクリエムヒルトの決心の背景には確かにジーフリトへの誠実な愛があったのである。彼女はこう考えたからである。

Do gedächte diu getriuwe: 《sīt ich vriunde hān
 alsō vil gewonnen, sō sol ich reden lān
 die liute, swaz si wellen, ich jāmerhaftez wīp.
 waz ob noch wirt errochen des mīnen lieben mannes līp?》
 (1259)

貞節な妃は考えた、「私はみじめな女だけれど、
こんなにかくさんの味方を手に入れた以上、
世の中の人にはなんとでも言いたいように言わせておこう。
愛^{いと}しい夫の復讐ができさえすれば、そんなことは何であろうか。」

エツェル王との再婚の決意も結局はジーフリトへの誠実からであり、それは下線部のように「貞節な妃」(diu getriuwe)と呼ばれていることから明らかである。彼女はただジーフリトへの誠実な愛のためにエツェル王と結婚するのであり、この結婚はクリエムヒルトにとって目的達成のための手段に過ぎない。その意味で、このエツェル王との再婚は前編のジーフリトとの結婚とコントラストをなすものである。ジーフリトとの結婚は、上述のようにいわば自然的に決定したのに対して、エツェル王との結婚は復讐という企みを含んだものであるからである。クリエムヒルトはフン族に嫁いでもジーフリトの「誠実な(triuwe)未亡人」のままであり、彼女は過去のことを彼女の生活の中から消し去ることはできないのである。まさにこの彼女の先の夫に対する激しい誠実な愛が、前編と同じように、その後さらに大きな悲劇をもたらすのである。

2. ハゲネとの対立 — grimme な鬼女 —

その誠実な愛に基づく復讐がついに実行へと移されるのが十三年後である。エツェル王とともに十三年もの間大きな誉れの中に暮らす日々ではあっても、彼女は故郷で我が身に加えられた悩み(leide, 1391, 4)を忘れはしなかったのであり、プリュンヒルトが自らの leide (侮辱) をそそぐために夫グンテルを言葉巧みに説き伏せてジーフリト夫妻を招待したと同様に、クリエムヒルトも自らの leide (悲しみ) の報復のため夫エツェルを欺いてブルゴント一族を招待するのである。しかもクリエムヒルトは、使者が旅立つにあたって、彼らを密かに呼び出して巧みな言伝(1415-9)を依頼する。今やクリエムヒルトは、騙^{だま}された前編とは対照的に、長い目で計画を立て、戦略的に計算する復讐魔として登場している¹⁶⁾ことが明らかである。一方、招待の知らせを受けたブルゴント族は、ハゲネの猛烈な反対にあって、激しい議論が飛び交うが、結局のところ招待に応ずる決意をする。国王兄弟から罵りの言葉を受けたハゲネは、名誉を重んずる心から、もはやブルゴントの国にとどまることはできずに、勇敢に旅立つことを明らかにする。ハゲネはハゲネで策略を練って、クリエムヒルトの欺き

に抵抗しようとする。クリエムヒルトは、戻って来た使者の報告(1499,4)によって、自分の計画がハゲネに見破られているという確信を持つが、これによって彼女の方も、ハゲネを捕えて復讐を遂げるにはどんな異常な努力を必要とするかを悟るのであり、ここに両者の対立が初めて表面化し、高まり始めるのである。

このようにブルゴント族を欺いてその到来を待ち受けるクリエムヒルトは、前編とは逆に、陰謀家の役割を果たしているが、一方、前編において陰謀家として描かれていたハゲネは、逆に英雄の役割を演じていて、フン族の国までの旅の途上にあっては一族にとって「杖とも柱とも頼む人間」(ein helflicher tröst, 1526, 2)として詩人によってほめ称えられている。今やブルゴント族滅亡の叙事詩本来の英雄ハゲネが登場するのであり、このハゲネと、これを出迎えるクリエムヒルトとの対立は「第一の対決」の場面から激しいものである。しかもこの二人の対立には常に財宝が関与していることが明らかである。偽りの心を抱きながら一族を出迎えたクリエムヒルトは、まずハゲネに財宝の返還をほのめかしてこう言う。

Si sprach: 《nu sīt willekomen,	swer iuch gerne siht.
durch iuwer selbes friuntschaft	sō grüeze ich iuwer niht.
saget, waz ir mir bringet	von Wormez über Rîn,
dar umb ir mir sō grōze	soldet willekomen sîn.》 (1739)

王妃はいった、「おん身に会いたがっている人は、おん身を歓迎もするでしょう。しかし私はおん身の好誼よしみのために挨拶をしようとは思わぬ。ただラインの彼方かなたウォルムスから何を持参したかを聞きたい。それによっては歓迎もしようが。」

このような挨拶に対してハゲネの方も決して負けてはいない。反抗的な嘲笑(1740)でもって答え、そのあとすぐさまクリエムヒルトが直接「ニーベルンゲンの宝はどこへやったか」(1741,2)と挑戦的に詰問するに及んでも、ハゲネは堂々と真正面から反抗心を示して次のように答える。

《Entriuwen, mîn vrou Kriemhilt,	des ist vil manec tac,
daz ich hort der Nibelunge	niene gepflac.
den hiezen mîne herren	senken in den Rîn,

dā muoz er wærlīche unz an daz jungeste sīn.》
(1742)

「王妃クリエムヒルト様、私がニーベルンゲンの宝を手放してから、
事実ながい年月がたっておるのです。主君がたは
あれをライン河に沈めよとご命令になりました。
宝は、まことに世界の末日まで河底にあるに違いありません。」

「あの宝は私のものであり、かつて私が護っていたものなのに、おん身は
少しもこの私の国に持って来てはくれなかった」(1743,2-3)と責め立てる
クリエムヒルトに対して、ハゲネは時を移さずともやクリエムヒルトの
嘆きをあざけてこう答える。

《Jā bringe ich iu den tiuvel》， sprach aber Hagene.
《ich hân an mînem schilde sō vil ze tragene
und an der mînen brünne; mîn helm der ist lieht.
daz swert an mîner hende des enbringe ich iu nieht.》
(1744)

「私はあなたに何一つ持参しておりません、」
ハゲネが重ねていった、「私は^{たて}楯やら^{よろい}鎧やら、また^{かぶと}輝く兜やら
手に持っている剣やらで、持物は沢山ありますが、
いずれもあなたに差しあげるものではございませぬ。」

ハゲネの言葉として「私は何一つ持参していないが、楯や鎧や兜は持って
きた」という表現が『ティードレクス・サガ』に伝承されている¹⁷⁾こと
を考えれば、この箇所におけるクリエムヒルトとハゲネの問答は素材に由
来するものと推定されてよいが、とにかくここでの問答の結果は明らかで
ある。クリエムヒルトの^{あざわら}苦しみを嘲笑うかのごとく常に皮肉な答え方をす
るハゲネが、この場面の指導権を握っているのであり、クリエムヒルトと
してはその反抗的な侮辱を甘受しなければならない。それだけに一層彼女は
あきらめることができない。ディエトリーヒがその場で呼びかけたよう
に、クリエムヒルトはまさに「鬼女」(vālandinne, 1748, 4)へと^お墮ちてゆ
くのである。

その後王冠を戴きながら近づいて来るクリエムヒルトに対してハゲネが立ち上がって礼をしない「第二の対決」の場面において、両者の対立はさらに高まる。ハゲネは立ち上がって礼をしないどころか、膝の上に財宝の一つであるジーフリの輝く剣を横たえて、クリエムヒルトを意図的に刺激するのである。「猛きハゲネの仕打ちも、彼女を泣かせるためであったろう」(1784,4)と詩人自らも語っている。ハゲネの傲然たる反抗にますます憎悪を強めたクリエムヒルトが「なぜジーフリを討ち果たしたか」(1789,1-3)と激しく詰問するに及んでも、ハゲネはもはや隠し立てはせず、正々堂々と自らの暗殺行為を明らかにする。これがクリエムヒルトに対する真正面からの挑戦でなければ一体何であろうか。このような傲然たるハゲネの態度に対して、クリエムヒルトの郎党はだれひとりとして戦う者がなかったので、王妃は心から情けなく感じたが、このクリエムヒルトの陰謀の失敗は、彼女をあきらめさせるのではなく、さらにひどい行動に駆り立てる。必死になって次々に援助を依頼するが、いずれも拒否されて、クリエムヒルトはますます怒り(grimme, 1865,1)を激しくしてゆく。その「grimme(^{どうもう} 獐猛)な鬼女」ぶりを最も顕著に示しているのが、戦いを始める手段として、彼女が自らの息子を広間へ連れて来させたときであることは言うまでもない。「婦人にして復讐のためかくも恐ろしい業を誰がなし得たか」(1912,4)と詩人によっても語られているが、この恐ろしい行為によって初めてクリエムヒルトは、エツェル王を戦いに誘い込むことに成功する。エツェル王は、すなわち、その場でハゲネによって打ち殺された自らの息子のためにブルゴント族と戦うこととなるのであり、これも愛しい夫ジーフリの仇討ちのためのクリエムヒルトの一つの策略であったとすれば、いかにクリエムヒルトが悪意のある策略家へと墮ちているかが明らかである。

エツェル王の参戦によって戦いは、もはやクリエムヒルトとハゲネ二人だけの個人的な戦いではなく、両民族をあげての死闘となって、本来のブルゴント族滅亡の物語が展開するが、最終場面において「第三の対決」としてクリエムヒルトとハゲネの個人的な二人の争いが繰り広げられる。このときも財宝が関与していることが明らかである。ディエトリーヒがついにハゲネとグンテルを捕えて、別々の獄舎へ閉じ込めたときのことである。王妃はハゲネのいる獄舎へ行って、憎しみをこめて次のようにハゲネに言葉をかける。

《sō wil ich doch behalten daz Sîfrides swert.
 daz truoc mîn holder vriedel, dô ich in jungest sach,
 an dem mir herzeleide von iuwern schulden geschach.》
 (2372,2-4)

「それならばせめてジーフリト殿の剣を貰^{もら}っておきましょう。
 これは私の愛^{いと}しい人の見納めの日に、あの人^{いと}が携えていたもの。
 私の心痛はおん身のために生じたものです。」

と言って、名剣バルムンクを鞘から抜き取って、ハゲネの頭を打ち落としたが、この言葉がクリエムヒルトの最後の言葉となったのも決して意味のないことではない。クリエムヒルトの復讐は、愛^{いと}しい夫ジーフリトの死による「心の悲しみ」(herzeleide)からなされたのであり、愛^{いと}しい夫ジーフリトへの変わらぬ愛のあかしである。ここで、復讐するクリエムヒルトのほかに、愛するクリエムヒルトも最後まで存続していることが示されているのであり、彼女の全ての企てはジーフリトに対する彼女の愛によって決定されていることが容易に理解できよう。なるほど後編に至っては英雄ハゲネの活躍が目立ってきて、素材に由来する本来のブルグント族滅亡の物語が展開されているが、しかし、その中でクリエムヒルトの愛の物語も平行的に続行しているのであって、上記の引用詩節の言葉でもって、ブルグント族滅亡の物語とクリエムヒルトの復讐の物語は一つになるのである。

結 び

以上のように見てくると、クリエムヒルトは冒頭の詩節から登場して、それ以後ほとんど舞台を去ることがないことが明らかである。確かにジーフリトやハゲネの活躍が目立ってくる場面もかなりの範囲にわたって詳細に述べられているが、しかし、全体のあらすじはジーフリトの死とそのための復讐という二つに収束するのであり、つまりは全ての出来事がことごとく彼女との関係によって起こるのである。彼女が運命を導くというよりは運命が彼女を支配しているにしても、彼女は前編と後編を結びつけるあらすじの糸を保持していることだけは明らかである。この前編と後編を結びつけるものが、すなわち、ジーフリトへの彼女の激しい愛である。なるほどクリエムヒルトが夫のために実兄たちに復讐を行うという改作はすで

に前段階で出来上がってはいたが、しかし、ニーベルンゲンの詩人はそのジーフリの死をブルグント族滅亡伝説に有機的に結びつけたのであり、この愛のために復讐するという新しいモチーフこそはニーベルンゲンの詩人の最も固有な業績の一つであると言ってよいであろう。このため『ニーベルンゲンの歌』には一見矛盾するかに見える二人のクリエムヒルトが描かれる結果となったが、しかし、この冒頭の無邪気な愛する乙女から結末の復讐する女性へのクリエムヒルトの変貌にこそ作品全体の特徴があると言えるのではあるまいか。ともかくクリエムヒルトは二重の像で描かれており、矛盾を含んだものであるが、まさにここにこそクリエムヒルト像の特質がある。否、この矛盾を隠そうとするのではなく、むしろ表面に強く出すことによって物語の効果を出しているのである。しかも、このクリエムヒルトの二重像は作品の冒頭からすでに予示されているのであって、クリエムヒルトはあらゆる節度をも越えてジーフリを愛し、悩み、復讐するだろうということは最初から明らかである。「歎びも結局は悲しみに終わる」(17,3; 2378,4)ということを示しているこのクリエムヒルトの変貌は、だから、作品全体の構成の特徴をも表しているのである。結末の復讐魔クリエムヒルトをきわだたせるために、つまりは全体の構成のために、詩人は前編においてはクリエムヒルトを愛する女性として強く打ち出しているのである。仇敵ハゲネが素材に由来する「権力」という古いモチーフを保持しているならば、クリエムヒルトはこの作品に「愛」という新しいモチーフを持ち込む役割を果たしているのであり、ニーベルンゲン悲劇は、畢竟、クリエムヒルトの「愛」とハゲネの「権力」という二つのモチーフが交錯する世界であり、この二つのモチーフが対立しながら、一つの悲劇的世界を形成しているところに中世叙事詩としての『ニーベルンゲンの歌』の特質があるのである。

*本稿は平成2年4月28日の九州大学独文学会で口頭発表したものに加筆修正を施したものである。

註

- 1) Andreas Heusler: Nibelungensage und Nibelungenlied. Dortmund 1921. (Nachdruck, Darmstadt 1973.)
- 2) 以下、中世叙事詩としての『ニーベルンゲンの歌』について述べる場合には中高ドイツ語に従い「プリュンヒルト」と表記する。「ブルゴント族」についても同様である。
- 3) テクストにはデ・ボアのブロックハウス版(第20版・1972年)を用い、邦訳は相良守峯訳(岩波文庫)をだいたいにおいてそのまま使用するが、論述の都合から表現を若干変えるところもある。
- 4) Vgl. Marianne Wahl Armstrong: Rolle und Charakter. Studien zur Menschendarstellung im Nibelungenlied. Göppingen 1979. S.248.
- 5) Vgl. ebd. S.250.
- 6) Vgl. ebd. S.252-3.
- 7) Vgl. A. Heusler: a. a. O., S.122.
- 8) 258, 260, 304詩節等を参照のこと。
- 9) 333, 388, 535-6詩節等を参照のこと。
- 10) Vgl. M. W. Armstrong: a. a. O., S.264.
- 11) Vgl. ebd. S.273.
- 12) Vgl. ebd. S.274.
- 13) Vgl. ebd. S.281.
- 14) Vgl. ebd. S.284-5.
- 15) Vgl. A. Heusler: a. a. O., S.98-100.
- 16) Vgl. M. W. Armstrong: a. a. O., S.299.
- 17) Vgl. Fine Erichsen(Übertragen): Die Geschichte Thidreks von Bern (Thule 22. Band) Jena 1924. S.396.
- 18) Vgl. Werner Schröder: Die Tragödie Kriemhiltis im Nibelungenlied. ZfdA. 90, 1960/61. S.154.
- 19) 「権力」のモチーフの詳細については拙稿: ニーベルンゲン悲劇の構図 — ハゲネの役割 — (徳島大学教養部紀要 — 人文・社会科学 — 第24巻・1989年)を参照のこと。
- 20) Vgl. M. W. Armstrong: a. a. O., S.164.